

---

# 明日に向かって

有璃香

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

明日に向かって

### 【コード】

N0859Q

### 【作者名】

有璃香

### 【あらすじ】

主人公を青虫に設定した冒険と友情の物語です。

昨日まで降り続いてきた雨が嘘のように、今日はとても空が青々として晴れています。

葉にはいくつかの水滴、そしてそれを避けるように、一匹の青虫が葉っぱの上をはっています。

「凄い雨だったなあ。僕はどうにか助かったけど仲間の青虫達、大丈夫かなあ。」

出来る限り体が濡れないように、さりげなく仲間を捜しながら、はいつけています。

「今日は良い天気。だけど敵にも見つかり易いんだなこんな日は。無理な行動はよそう。この辺は、いっぱい食べれるところあるもんねぶくぶく太って敵に見つかりやすいかも知れない。」

目の前の葉を食べ始めました。この辺りは住宅街になっていて、沢山のマンションが建っています。この青虫君がいる公園にも良く子供達が遊びにやって来て、ボールや鬼ごっこで遊んでいます。

「進五、暗くならないうちに帰るのよー。」

お母さんがベランダから大きな声で言いました。その声は辺りに響いて聞こえました。

「恥ずかしいなあ、もう。わかってるよ。」

うつむいて頭をかいていると、一緒に遊んでいる友達もくすくす笑っていました。

「大丈夫だよ、俺達。みんな、この辺に住んでいるから。」

「そうだよ。おばさんが心配してるって言う事は、僕のママいや、お母さんも心配してるって言う事だもん。」

「まだ、ママって言うてるんだなあ。」

「進五、内緒にしてて。」

5人で遊んでいました。

サッカーしたり、砂遊びで手がどろどろになったり……。あつと言つ間に時間が過ぎて行きました。暗くなり始め、そろそろ家に帰る時間になりました。

「もう帰らないとだめじゃないかなあ。」

「そうね、進五君とも含めて親が心配しちゃうからね。」

「じゃあ、今日は解散と言つ事で。」

「うん、じゃあね、又、学校でね。」

それぞれ手を振って、うまく片寄らないで帰って行きましたが、進五君は自分と同じ目線にある木の葉に目が止まりました。

「ん？」

大きくぶくぶく育つた青虫がいました。とても色鮮やかな色彩をしていて、全く動いていませんでした。

「あれ？死んでんのかなあ。」

その青虫が着いている葉の枝ごと、ポキッと折っているんな角度から青虫を見てみました。

「きれいだけど気持ち悪いな。お母さんに見せたらびっくりするだろうな。」

しばらく、その青虫を見つめていました。

青虫の方も動いたらまずいと思い、見られている間は体を動かさませんでした。

「よし！」

進五君はそのまま家まで走って帰って行くと、

「ただいまーっ」

お母さんにすぐ見つかりました。両手を腰に当てて、

「どうするの？虫は飼つとすぐ死んじゃうわよ。自然に帰した方がいいわよ。」

「う、ごめんなさい。1日だけ観察して良い？これだけ葉っぱが着いていたら食料は1日分はあるから。」

自分の部屋の机に置く準備をしました。まずこの枝が枯れないよう

に、花瓶に水を入れてさし、青虫が水の中に落ちないように、口が小さめの花瓶を選びました。そして机の右側、窓際に置きました。窓は少し開いていました。

「進五、宿題した？」

「うん、したよ。」

「それじゃあ、お風呂入って早く寝なさい。」

「はい。」

青虫はこんな高い所まで来た事がないなあ、と思いました。そして初めて、夜空を見ました。

「あのキラキラ輝いて美しい石みたいなのは何だろう？ここはあの少年の家なんだな。広すぎてわからない。」

青虫は顔を少し上げて美しい星が輝いている夜空を眺めていました。すると遠くから黒い影が見えて来て、青虫もそれが一羽の鳥だとわかり、体の動きを止めましたが鳥は一度、窓の側を過ぎたのですが戻って来て、窓際で飛びながら静止していました。そして青虫を見つけると、素早く枝ごとくわえてどこかへ飛んで行きました。

それが起きてから数分後に進五君が部屋に戻って来ました。机の上には数枚の葉、花瓶が倒れていました。

「あーあ。」

呆然とつつ立つて、言葉を無くしていました。

「僕をどこへ連れて行くんだい？」

風がびゅんびゅん、青虫の体に当たっていて葉に一生懸命にひっ付いていました。

「子供達のいる所、つまり餌にしようとしてるんだよ。きれいな青虫君。」

「僕を食べても美味しくないんだよ。毒がたっぷり入っているからね。」

鳥も必死でした。嘴で枝をくわえ、風が強く吹き、真夜中なので真つ暗、星の明かりだけが頼りでした。

「いつまで飛ぶんだい？ずいぶん長い間・・・。」

「し、静かにしてくれないか、この方角で良いと思うのだが。あー見えた見えた海が。」

「海？」

青虫は顔をほんの少し下に向けると黒くて非常に大きな水溜りが見え、

「これが海？凄くたくさんの水が溜まつてる。」

まだまだ飛び続けました。海の上を長い間飛び続けると小さな鳥が見えて来ました。鳥はほつとして、疲れが出てきて、どこかへ休みたい気持ちになり、その小さな島の大きな木の上で休憩をする事にしました。大きな木の枝に止まると青虫が逃げないように、枝を羽に突き刺して眠ってしまいました。

「逃げるなら今だ！どっちにしてもどうせ食べられるかも知れないから。」

力いっぱい振り絞って、乗っていた葉からジャンプしました。

ずーっとずーっと下へ真つすぐ落ちて、運良くどこにも体をあてる事なく落ちて行きました。地面はたくさん葉が生い茂って、大きな葉の上に体をぶつけると、跳ね返ってもう一度違う大きな葉の上に乗りました。青虫はその葉の裏側にひっ付いて、そのまま眠ってしまいました。

翌朝、青虫は大変驚きました。こんな大自然は生まれて初めて見たからです。見た事もない生き物や美しい草花が咲き乱れていました。高い木や低い木も所々に。

「ここはどこ？なんて美しい場所なんだ。」

空を見上げると高い所でたくさん鳥達が飛んでいました。

「敵も多いし餌もたくさんある。こんなきれいな花達を見た事が無い。早く大人になって自由にすばしっこくになりたい。」

何日間は、その小さな範囲で生活をしていました。やがてさなぎになり、立派な大きな蝶に生まれ変わりました。この場所には蝶がこの一匹だけでした。

「やっと飛べるようになった。今度は花の蜜をたくさん吸うんだ。」  
周りに咲いている美しい色鮮やかな花の上をあちこちと飛び回り、花の蜜を吸っているとその花のような美しい羽に変わっていきました。

「何だかパワーがついたし、羽の色も今までと違ってきたみたいだ。少し、もう少し高く飛んで見よう。」

試しで高く飛ぼうとすると、思っていたより高く上昇する事が出来ました。

「おおっと、これ以上高く行くと、今は鳥がいるから危ない。」  
今度は低く飛んで羽を休ませました。葉の上に止まると羽が花の様に見えました。

「こうやって羽を広げると花みたい。よし！」  
蝶はある決心をしました。もう一度、あの少年のいる地域まで帰りたいなど。

「長い距離だった。僕一匹で心細いけど……。命がけの旅になりそうだ。しばらく無駄な体力を使わないようにしないと。」

その晩はぐっすり休み、次の日、目を覚ますといつも飛んでいる鳥の姿がほとんど見かけませんでした。

これはチャンスだと思い、この場所から脱出しようと思中、花の蜜をたっぷり吸って、夕方、空高く旅立ちました。意外とスピードが出るなど、思いましたが風の力でかなり助かっていました。

「海って怖いなあ、落ちると終わりだ。これぐらいにちょうど良く風が吹き続けたら、ありがたいんだけど。誰も追って来ないだろうね。」

後ろに向きを変えて見ると、ほっとしました。

向きを戻すと、ちょうど同じ目線で鳥の群れが見えたので、低く下

に海面ギリギリにしばらく飛び、鳥の方が速いので過ぎ去るとすぐ上昇し、

「あー疲れる。早く日が昇ってほしい。」

1日半、飛びました。花を見つけるとすぐ羽を休め、どうにかして懐かしい空気漂う公園に着くと、その夜はぐっすり眠りました。

朝、子供達の声が聞こえ、はっ！として、木の葉の陰から覗いて見ると、あの少年がいました。

「うわあ懐かしいなあ、きっと僕からは長い時間だったけれど、人間の時間だとあまり経っていないんだろうね。」

「行って来ます。」

進五君の大きな声でした。

学校から帰る時間が近づいて来ると雲行きが怪しくなっていました。進五君は授業が終わると走ってマンション5階の家に帰って来ていました。

「あら？今日は早かったのね。」

「うん、雨が降りそうなんだもん。」

急いで自分の部屋のドアを開けて振り返ると、机の上に一匹の大きくきれいな蝶が羽を広げて止まっていました。

「びっくりしたあー、ちょうちょだ！」

じーっと見つめていると、

「いなくなつた青虫の色に似ているな。気持ち悪いけどきれいだな。」

そして、お母さん呼びました。

「お母さん」

「そんな大声出さなくても。」

机の上を見て驚き、

「蛾？でもなさそうね。蝶？」

「このちょうちょよ、飼っても良い？でも餌がないや。」



「よくここまで飛んで来たわね、5階なのに。飼うのはだめよ。もう少し窓を開けて、そしたら飛んで帰って行くわよ。」

「あの青虫に似てない？」

「そういえばそうね。もし、あの青虫の成虫だったら・・・何て言えればいいのかしら。」

「元気だったよって、知らせに来たんだよ。」

蝶がすーっと浮いて部屋の天井近くを飛んで一周すると、窓から出て去りました。

「わかってくれたみたい。」

幼虫の頃、住んでいた木がわかると止まり、

「僕もたくさん友達作りたい。ここらへんにいる蝶より僕はでかいから、心配。ただ、明日に向かって生きていくだけなのかもね。」

進五君はその夜、考えました。

「あの蝶はきつとあの青虫。大きな蝶だし、目立つから僕や僕の友達と一緒に、敵が来たら守ってあげるからね。」

終

(後書き)

誰でも読めるような、そんな作品だと思います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0859q/>

---

明日に向かって

2011年1月16日00時24分発行